

VIII. ローレンツ空間形

ローレンツ多様体 多様体 M の次元を n とする． M の各点 P における接空間 $T_P M$ に，符号数 $(n-1, n)$ の内積（ミンコフスキー内積） $\langle \cdot, \cdot \rangle_P$ が与えられていて，次の意味で滑らかであるとする：

任意の C^∞ -級ベクトル場 X, Y に対して次の写像は C^∞ -級：

$$\langle X, Y \rangle : M \ni P \mapsto \langle X_P, Y_P \rangle_P \in \mathbb{R}.$$

このとき，組 $(M, \langle \cdot, \cdot \rangle)$ をローレンツ多様体とよぶ¹⁾．

例 8.1. ローレンツ・ミンコフスキー空間 \mathbb{R}_1^n は，各接空間を \mathbb{R}_1^n と同一視すれば，ローレンツ多様体であることがわかる． \diamond

例 8.2. 正の整数 n と正の実数 k に対して

$$(8.1) \quad S_1^n(k) := \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}_1^{n+1} \mid \langle \mathbf{x}, \mathbf{x} \rangle = \frac{1}{\sqrt{k}} \right\} \subset \mathbb{R}_1^{n+1}$$

とおく．これは，第 III 回で挙げた二次曲面 $Q_{1/\sqrt{k}}$ である（式 (3.3)）．特に， $S_1^n(k)$ は \mathbb{R}_1^{n+1} の滑らかなかつ連結な超曲面で，点 $\mathbf{x} \in S_1^n(k)$ における単位法線ベクトルは $\nu := \sqrt{k}\mathbf{x}$ である．とくに $\langle \nu, \nu \rangle = 1$ なので単位法線ベクトルは空間的．したがって，計量の接空間への制限の符号は $(n-1, 1)$ となり， $S_1^n(k)$ がローレンツ多様体であることがわかる．これをド・ジッター空間またはド・ジッター時空という²⁾ \diamond

例 8.3. 正の整数 n と正の実数 k に対して \mathbb{R}_2^{n+1} の部分集合

$$(8.2) \quad H_1^n(-k) := \left\{ \mathbf{x} \in \mathbb{R}_2^{n+1} \mid \langle \mathbf{x}, \mathbf{x} \rangle = -\frac{1}{\sqrt{k}} \right\} \subset \mathbb{R}_2^{n+1}$$

とおく．すると，特に， $H_1^n(-k)$ は \mathbb{R}_2^{n+1} の滑らかなかつ連結な超曲面で，点 $\mathbf{x} \in H_1^n(-k)$ における単位法線ベクトルは $\nu := \sqrt{k}\mathbf{x}$ である．とくに

^{*)} 2017 年 5 月 30 日

¹⁾ ローレンツ多様体：a Lorentzian manifold.

²⁾ ド・ジッター空間：the de Sitter space. 反ド・ジッター空間：the anti de Sitter space.

$\langle \nu, \nu \rangle = -1$ ．接空間は ν の直交補空間だから，定理 1.24 から計量の接空間への制限の符号は $(n-1, 1)$ となり， $H_1^n(-k)$ がローレンツ多様体であることがわかる．これを反ド・ジッター空間または反ド・ジッター時空という． \diamond

ローレンツ空間形 ローレンツ多様体にはリーマン多様体と同様な方法で共変微分が定義できるので，接空間の非退化な 2 次元線形部分空間に対して断面曲率を定義することができる．

例 8.4. ローレンツ・ミンコフスキー空間の断面曲率は恒等的に 0 である． \diamond

例 8.5. ド・ジッター空間 $S_1^n(k)$ の断面曲率は恒等的に k である．これは，定理 5.11 の類似を用いれば示すことができる． \diamond

例 8.6. 反ド・ジッター空間 $H_1^n(-k)$ の断面曲率は恒等的に $-k$ である． \diamond

一方，ローレンツ多様体の共変微分概念を用いれば，測地線も定義できる．測地線 $\gamma(t)$ に対して $\langle \dot{\gamma}, \dot{\gamma} \rangle$ は t によらず一定なので（補題??），とくに $\dot{\gamma}$ の因果特性は測地線上で変化しない．速度ベクトルが空間的（時間的，光的）な測地線を空間的測地線（時間的測地線，光的測地線）という³⁾

例 8.7. ローレンツ・ミンコフスキー空間 \mathbb{R}_1^n の，時刻 $t=0$ で点 p を速度 $v \in T_p \mathbb{R}_1^n$ で通過する測地線は

$$\gamma_v(t) = p + tv$$

である．実際 $\ddot{\gamma}_v(t) = 0$ だから γ_v は測地線である． \diamond

例 8.8. ド・ジッター空間 $S_1^n(k)$ 上の点 x と x における零でない接ベクトル v （すなわち $\langle x, v \rangle = 0$ となる零でないベクトル）をとり，

$$|v| := \sqrt{|\langle v, v \rangle|} (> 0)$$

とおく．このとき，時刻 $t=0$ で点 x を速度 v で通過する測地線 γ_v は次のように表示される：

³⁾ 空間的測地線：a space-like geodesic, 時間的測地線：a time-like geodesic, 光的測地線：a light-like geodesic.

- v が空間的, すなわち $\langle v, v \rangle > 0$ のとき,

$$\gamma_v(t) = \sqrt{k} \left((\cos \sqrt{k}|v|t) \frac{\mathbf{x}}{\sqrt{k}} + (\sin \sqrt{k}|v|t) \frac{\mathbf{v}}{|v|} \right).$$

- v が時間的, すなわち $\langle v, v \rangle < 0$ のとき,

$$\gamma_v(t) = \sqrt{k} \left((\cosh \sqrt{k}|v|t) \frac{\mathbf{x}}{\sqrt{k}} + (\sinh \sqrt{k}|v|t) \frac{\mathbf{v}}{|v|} \right).$$

- v が光的, すなわち $\langle v, v \rangle = 0$ のとき,

$$\gamma_v(t) = \mathbf{x} + t\mathbf{v}.$$

実際, これらの曲線 $\gamma(t) := \gamma_v(t)$ は

$$\nabla_{\dot{\gamma}} \dot{\gamma} = [\ddot{\gamma}]^T = [k \langle v, v \rangle]^T = \mathbf{0}$$

である⁴⁾. ◇

例 8.9. 反ド・ジッター空間 $H_1^n(-k)$ 上の点 x と x における零でない接ベクトル v (すなわち $\langle x, v \rangle = 0$ となる零でないベクトル) をとり,

$$|v| := \sqrt{|\langle v, v \rangle|} (> 0)$$

とおく. このとき, 時刻 $t = 0$ で点 x を速度 v で通過する測地線 γ_v は次のように表示される:

- v が空間的, すなわち $\langle v, v \rangle > 0$ のとき,

$$\gamma_v(t) = \sqrt{k} \left((\cosh \sqrt{k}|v|t) \frac{\mathbf{x}}{\sqrt{k}} + (\sinh \sqrt{k}|v|t) \frac{\mathbf{v}}{|v|} \right).$$

- v が時間的, すなわち $\langle v, v \rangle < 0$ のとき,

$$\gamma_v(t) = \sqrt{k} \left((\cos \sqrt{k}|v|t) \frac{\mathbf{x}}{\sqrt{k}} + (\sin \sqrt{k}|v|t) \frac{\mathbf{v}}{|v|} \right).$$

- v が光的, すなわち $\langle v, v \rangle = 0$ のとき,

$$\gamma_v(t) = \mathbf{x} + t\mathbf{v}.$$

⁴⁾第 VI 回で与えた超曲面の測地線の表示は, 超曲面の計量が不定値であっても, 非退化であれば成立する.

実際, これらの曲線 $\gamma(t) := \gamma_v(t)$ は

$$\nabla_{\dot{\gamma}} \dot{\gamma} = [\ddot{\gamma}]^T = [k \langle v, v \rangle]^T = \mathbf{0}$$

である⁵⁾. ◇

ローレンツ多様体の任意の測地線が \mathbb{R} 全体で定義されるとき, ローレンツ多様体は完備であるという⁶⁾. 完備, 断面曲率一定のローレンツ多様体をローレンツ空間型とよぶ.

例 8.1 のローレンツ・ミンコフスキー空間, 例 8.2 のド・ジッター空間, 例 8.3 の反ド・ジッター空間はそれぞれ断面曲率 0, 正, 負の空間型を与えている.

⁵⁾第 VI 回で与えた超曲面の測地線の表示は, 超曲面の計量が不定値であっても, 非退化であれば成立する.

⁶⁾ローレンツ計量は, 直接距離を誘導しないので, 距離空間としての完備性とここで述べた完備性の関係 (ホップ・リノーの定理 ??) はそのままの形では成立しない.